

研究論文

夢想起とイメージ及び心的境界の関連

The relationships among dream recall, imagery, and boundary in the mind

田村 英恵¹⁾ 吉田 加代子¹⁾
Hanae Tamura Kayoko Yoshida

本研究では、夢想起とイメージ及び心的境界の関連について検討することを目的とした。イメージ想起に関わる特性として鮮明性と統御性、心的境界として境界の脆さと曖昧さ、夢想起に関わる側面として頻度、鮮明性、内容、感覚モダリティを取り上げた。

大学生に Questionnaire upon Mental Imagery の短縮版 (QMI; Sheehan, 1967), Test of Visual Imagery Control (TVIC; Gordon, 1949), 日本語版境界尺度 (JBQ; 児玉, 2013), 夢想起に関する尺度 (岡田, 2000) を実施し、全ての項目に回答が得られた198名のデータを分析対象とした。境界尺度に関しては、「境界の脆さ」と「意識された境界の曖昧さ」について7項目ずつ抽出したため、因子分析を行った。結果、因子1「意識された境界の曖昧さ」6項目、因子2「境界の脆さ」4項目、計10項目を以降の分析に用いた。

分析の結果、夢想起の鮮明性はイメージの鮮明性 (QMI) 及び心的境界と有意な正の相関が認められた。同様に、イメージの鮮明性 (QMI) はイメージの統御性 (TVIC) 及び心的境界と有意な正の相関が認められた。また、イメージの鮮明性の高群が低群に比べて夢想起の鮮明性が有意に高いことが示された。したがってイメージと心的境界及び夢想起の関連性、なかでも夢想起の鮮明性とイメージの鮮明性、心的境界の関連性が示唆された。

【キーワード】 イメージの鮮明性、イメージの統御性、心的境界、夢想起

問題

臨床場面では、夢の体験や内容が語られることも多く、夢を活かした心理療法が行われることもある。心理療法において夢は、意識と無意識の関わり方もしくは意識と無意識の折り合いを示すものであり、その関わりの中で治療上重要な過程が進んでいるともいわれる (川崎, 2007)。あるいはより直接的な問題として、不安夢や悪夢障害など想起する夢自体が個人に精神的苦痛を与える場合があり、夢が治療の対象になることもある (松田, 2006)。夢は臨床場面において重要な要素と考えら

れるが、夢生起やその産出過程である夢見自体を研究対象とすることは困難であり、夢生起の一部が再生される夢想起から類推する方法を取らざるをえない (松田, 2006)。本研究においても夢生起や夢見を対象とするのではなく、夢想起について取り上げていく。

夢想起を検討する場合、頻度や鮮明性、感覚モダリティ、内容、生起する感情等、いくつかの観点がある。夢想起頻度や鮮明性等の個人差に着目した場合、これまでにイメージ、あるいは自我の強さ・心的境界・抑圧傾向・情動的安定性等のパソナリティに関わる要因との関連が検討されてい

1) 立正大学心理学部 Faculty of Psychology, Rissho University

る（岡田，2001；Domhoff & Gerson, 1967；Robbins & Tanck, 1971等）。

準感覚的・準知覚的体験としてのイメージと夢想起については、イメージの鮮明性ととの関連が検討されている（Marks, 1983；Hiscock & Cohen, 1973；Richardson, 1979等）。Hiscock & Cohen (1973) は夢の想起頻度と視覚イメージ・聴覚イメージの鮮明性ととの関連を検討し、夢想起頻度の高群が低群に比して視覚イメージの鮮明性が高いことを示している。また、Richardson (1979) は視覚イメージが鮮明であるほど夢の想起頻度が高いことを報告している。さらに、Richardson (1983) はイメージの鮮明性と夢の想起頻度及び夢の色彩感覚について検討し、イメージの鮮明性と想起頻度との間には有意な相関は認められなかったものの、イメージの鮮明性と夢の色彩感覚との間に弱いもしくは中程度の正の相関を見出している。色彩感覚の強さは、夢がより現実に近いこと、つまり夢想起がより鮮明であることにも繋がる。したがって、イメージの鮮明性は夢の想起頻度や鮮明性と関連していることが予測される。

Richardson (1969) はイメージの鮮明性と統御性の組み合わせを重視し、二次元からイメージに関わる様々な事象を説明している。また、臨床場面ではイメージの統御能力が重要になることも知られている。したがってイメージの鮮明性のみでなく、イメージの統御性についても夢想起との関連を検討する必要がある。統制されない流動的なイメージは自我境界の弱さをあらわすといわれ（大熊・鈴木, 1983）、イメージの統御性は心的境界とも関わりがあると考えられる。

夢想起と心的境界については、Hartmann & Kunzendorf (2006) により、境界が薄いと夢想起頻度が高くなり、夢の内容も情動的でより夢らしいものになることが報告されている。同様にAumann & Pietrowsky (2012) は、境界が薄い者は頻繁に夢を想起し、内容もより奇怪であることを示している。また、児玉 (2006) は、身体像境界の透過性の高さや夢体験の関連を指摘している。したがって、夢想起の諸側面と心的境界の薄さと

は関連がある可能性が高い。

そこで本研究では、夢想起の頻度・鮮明性・内容・感覚モダリティ、イメージについては鮮明性・統御性、さらに心的境界の薄さを反映すると考えられる心的境界の脆さ・曖昧さを取り上げ、それらの関連を検討することを目的とする。同時に、夢生起メカニズムの解明においては夢の形式的特徴を把握することが重要であるとの指摘（Hobson, 1988）や、夢想起の個人差についての組織的検討の少なさ（岡田, 2000）を考慮し、夢想起の様相についても報告する。

方 法

調査時期

2018年12月

調査対象者

心理学関連の授業を受講する大学生のうち、以下の尺度にすべて回答した198名（男性68名、女性128名、不明2名）の結果を分析の対象とした。平均年齢は20.1歳（ $SD = 2.6$ ）であった。

尺度構成

1. 夢想起に関する尺度

岡田 (2000, 2011) が用いた過去1ヶ月間の夢に関する体験頻度を問う尺度のうち、夢想起頻度、夢想起の鮮明性、夢の特定の内容の体験頻度、感覚モダリティ別想起頻度について回答を求めた。夢想起頻度は、“1：全く見ない” “2：めったに見ない” “3：月に1, 2回” “4：週に1, 2回” “5：2日に1回” “6：ほとんど毎日” “7：毎日” の7件法、夢想起の鮮明性は、“1：ほんやりしてかすかである” ～ “4：非常にはっきりしていて、実際の出来事と同じくらいである” の4件法で実施した。夢の特定の内容については、「自分が飛ぶ夢」「自分が落ちる夢」「自分が何かに追いかけてられている夢」「怖くて目が覚めてしまうくらいの悪夢」「怖い目が覚めることはなかった悪夢」「『自分は今夢を見ている』と夢の中で自覚した夢」の6項目の経験頻度を“1：全く見ない” “2：めったに見ない” “3：月に1, 2回” “4：

週に1, 2回” “5: 2日に1回” “6: ほとんど毎日” “7: 毎日” の7件法で回答を求めた。感覚モダリティ別想起頻度は, 夢を体験した際の視覚, 色彩感覚, 聴覚, 発話, 運動感覚, 味覚, 嗅覚, 皮膚感覚, 内臓感覚, 痛覚, 温度感覚の11項目について, “1: 全くない” ~ “5: いつもある” の5件法で測定した。得点が高いほど各々の頻度または鮮明性が高いことを示す。

2. イメージの鮮明性

Questionnaire upon Mental Imagery の短縮版 (QMI; Sheehan, 1967) を用いた。QMI は, 視覚, 聴覚, 触覚, 筋感覚, 味覚, 嗅覚, 身体感覚の7つの感覚モダリティについてそれぞれ5項目ずつ, 計35項目で構成されている。“1: イメージは全然あられもない。その対象について考えているという体験だけ” ~ “7: 完全に明瞭で, 現実の体験と同じ鮮明さである” の7件法で測定した。得点が高いほど鮮明であることを示す。

3. イメージの統御性

統御性に関しては, 視覚イメージの統御性を測る Test of Visual Imagery Control (TVIC; Gordon, 1949) を用いた。全12項目について, “1:

いいえ” “2: はっきりしない” “3: はい” の3件法で回答を求めた。得点が高いほど, 視覚イメージの統御性が高いことを示している。

4. 心的境界

日本版境界尺度 Japanese Boundary Questionnaire (JBQ; 児玉, 2013) の「境界の脆さ」及び「意識された境界の曖昧さ」より, 協力者の負担を考慮し, 7項目ずつ抽出し実施した。計14項目について, “0: 全くあてはまらない” ~ “4: とてもあてはまる” の5件法で測定した。得点が高いほど境界の薄さを示す。

手続き

講義時間の中で集団で実施した。調査への参加は任意であること, 結果は統計的に処理され個人が特定されることはないこと, 途中で参加をやめても不利益は及ばないことを説明し, 調査参加への同意が得られた者のみ回答を求めた。

結果

境界尺度 (JBQ) の因子構造及び信頼性の検討

日本版境界尺度 (児玉, 2013) の「境界の脆さ」

Table 1 心的境界 (JBQ) の因子分析結果

項 目	第1因子	第2因子
因子1: 意識された境界の曖昧さ ($\alpha=.75$)		
11 私の中でいろんな考えが互いに混ざり合っている	.857	-.137
8 私の中でいろんな感情が互いに混ざり合っている	.803	-.037
9 誰でも時たまちょっと狂気になることがある	.588	.107
14 健常人々, 何か問題を持った人々, 精神病的または狂気だと思われる人々との間を, はっきりと区別するような線はない	.467	-.037
2 誰かと深く関わりすぎることは, 時に恐ろしいことだ	.384	.064
4 全ての男性が彼等の中にどこか女性的なものを持っており, 全ての女性がどこか男性的なものを持っている	.374	.066
因子2: 境界の脆さ ($\alpha=.77$)		
5 音楽を聞くと, 時々没頭してしまうあまりに現実世界に戻ってくるのが難しくなることがある	-.130	.851
7 ゲームや何かの遊びにまさに夢中になっている時, そのゲームを止めて現実世界に戻ってくるのが時々大変になる	.097	.633
6 会話やある音楽を思い出す時, それがまさに私の目の前で再現されているかのように聞こえる	-.019	.605
12 何かを必要とする時, そのことに没頭するあまりに現実世界に戻ってくるのが難しくなることがある	.277	.581
	因子間相関	.383

及び「意識された境界の曖昧さ」より7項目ずつ抽出した上で実施したため、因子分析（一般化最小二乗法、直接オブリミン回転）を行なった。固有値の変化と因子の解釈可能性より2因子構造が妥当であると判断した。因子負荷量.35以下である項目及び2因子共に.35以上の負荷を示す項目を削除し、再度回転させた結果、最終的に2因子10項目を採用した。Table 1に因子負荷量及び因子間相関を示した。

第1因子は、“私の中でいろんな考えが互いに混ざり合っている”“私の中でいろんな感情が互いに混ざり合っている”などからなり、元にした境界尺度に準じて「意識された境界の曖昧さ」とした。第2因子は、“音楽を聞くと、時々没頭してしまうあまりに現実世界に戻ってくるのが難しくなることがある”“ゲームや何かの遊びにまさに夢中になっている時、そのゲームを止めて現実世界に戻ってくるのが時々大変になる”などからなり、境界尺度に準じて「境界の脆さ」とした。因子間相関では、弱い正の相関が見られた。

下位尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、「意識された境界の曖昧さ」は.75、「境界の脆さ」は.77であり、また尺度全体で.78であった。十分な内的整合性を有していると判断し、これ以降の分析には「意識された境界の曖昧さ」6項目、「境界の脆さ」4項目の計10項目を用いた。

夢想起の様相

Table 2に夢想起に関する尺度の基本統計量と度数分布（%）を示す。

夢想起頻度の平均値は4.13であり、「4：週に1、2回」の回答が全体の33.3%を占めていた。同様に夢想起の鮮明性については、平均値は2.72であり、「3：かなりはっきりしているが、実際の経験ほどではない」との回答が全体の45.5%を占めていた。

内容に関しては、飛ぶ夢や落ちる夢、悪夢は「1：全く見ない」または「2：めったに見ない」の回答が各々の全体の70%以上を占めていた。追

Table 2 夢想起に関する尺度の基本統計及び度数分布（%）

項目	平均値 (SD)	1	2	3	4	5	6	7
頻度	4.13 (1.29)	1.5	7.6	22.7	33.3	16.2	16.7	2.0
鮮明性	2.72 (.80)	5.6	32.8	45.5	16.2	-	-	-
内容								
飛ぶ	1.45 (.60)	60.1	34.3	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0
落ちる	1.95 (.88)	34.8	40.9	19.2	4.5	0.5	0.0	0.0
追いかけられる	2.22 (1.00)	27.3	33.3	31.8	6.1	0.5	1.0	0.0
覚醒ありの悪夢	1.81 (.89)	44.9	33.8	17.7	3.0	0.0	0.5	0.0
覚醒なしの悪夢	2.04 (.97)	34.3	36.4	22.7	5.1	1.0	0.5	0.0
夢の自覚あり	2.25 (1.25)	38.4	20.7	24.7	12.1	2.0	2.0	0.0
感覚								
視覚	4.27 (.99)	2.0	3.0	17.2	21.2	56.6	-	-
色彩感覚	4.33 (1.07)	3.5	4.0	12.6	15.7	64.1	-	-
聴覚	4.23 (1.11)	4.0	6.1	10.1	22.2	57.6	-	-
発話	3.67 (1.27)	7.6	11.6	21.7	24.7	34.3	-	-
触覚	2.81 (1.29)	18.2	27.3	22.7	19.2	12.6	-	-
運動感覚	4.23 (1.08)	4.5	4.5	8.6	28.3	54.0	-	-
味覚	1.79 (1.01)	50.0	32.3	8.1	7.6	2.0	-	-
嗅覚	1.76 (1.04)	52.0	32.3	6.6	5.6	3.5	-	-
内臓感覚	2.39 (1.26)	30.8	29.3	16.7	16.7	6.6	-	-
痛覚	2.26 (1.30)	38.9	25.3	13.1	16.2	6.6	-	-
温度感覚	2.18 (1.25)	38.4	30.3	14.1	9.6	7.6	-	-

※「-」は設定なし

いかけられる夢は「2：めったに見ない」の回答が33.3%と最も多く、次いで「3：月に1, 2回」が31.8%であった。夢の自覚がある明晰夢については、「1：全く見ない」が38.4%, 次いで「3：月に1, 2回」が24.7%であった。

感覚モダリティ別頻度については、色彩感覚の平均値が最も高く、続いて視覚、聴覚・運動感覚であった。これらの項目は「5：いつもある」の回答が各々の全体の50%以上を占めていた。味覚、嗅覚の平均値は他に比べて低く、「1：全く見ない」の回答が各々の全体の50%以上を占めていた。

イメージの鮮明性 (QMI)・イメージの統御性 (TVIC)・心的境界 (JBQ) の基本統計及び相関

イメージの鮮明性の平均得点は、視覚23.67 ($SD = 5.62$), 聴覚23.82 ($SD = 6.54$), 触覚20.51 ($SD = 6.17$), 運動感覚23.73 ($SD = 5.88$), 味覚21.68 ($SD = 7.26$), 嗅覚17.89 ($SD = 6.63$), 身体感覚24.17 ($SD = 5.97$), 合計155.46 ($SD = 34.73$)であった。イメージの統御性の平均得点は30.33 ($SD = 4.96$)であった。心的境界の平均得点は、意識された境界の曖昧さ17.68 ($SD = 3.74$), 境界の脆さ8.11 ($SD = 4.02$), 合計25.79 ($SD = 6.38$)であった。

イメージの鮮明性・統御性と心的境界の相関係数を算出し、Table 3に示した。

イメージの統御性は、イメージの鮮明性の聴覚・

触覚・運動感覚・味覚・嗅覚・合計得点との間に弱い正の相関が認められた ($r = .20 - .36, p < .001$ 味覚のみ $p < .01$)。心的境界の脆さについては、イメージの鮮明性の視覚・触覚・合計得点との間に弱い正の相関がみられた ($r = .22 - .24, p < .01$)。また心的境界の合計得点は、イメージの鮮明性の視覚・触覚・身体感覚・合計得点との間に弱い正の相関を示した ($r = .21 - .25, p < .01$ 視覚のみ $p < .001$)。イメージの統御性と心的境界は有意な相関が認められなかった。

夢想起とイメージの鮮明性 (QMI)・イメージの統御性 (TVIC)・心的境界 (JBQ) の相関

夢の想起頻度・鮮明性・内容・感覚モダリティとイメージの鮮明性, イメージの統御性, 心的境界の尺度間の相関係数を算出し、Table 4に示した。

夢想起頻度と夢想起の鮮明性は弱い正の相関 ($r = .23, p < .01$) を示した。夢想起頻度はイメージの統御性とのみ有意な相関 ($r = .16, p < .05$) が認められた。一方、夢想起の鮮明性は、イメージの鮮明性の運動感覚及び合計得点, 心的境界合計得点と弱い正の相関を示した ($r = .20 - .21, p < .01$)。

夢想起の内容のなかで落ちる夢は、イメージの鮮明性の触覚・運動感覚・味覚・合計得点と弱い正の相関を示した ($r = .20 - .24, p < .01$)。

Table 3 イメージの鮮明性 (QMI) と統御性 (TVIC) 及び心的境界 (JBQ) の相関

	TVIC	JBQ		
		曖昧さ	脆さ	計
QMI: 視覚	.16 *	.18 *	.24 **	.25 ***
聴覚	.34 ***	.10	.14	.15 *
触覚	.36 ***	.17 *	.22 **	.24 **
運動感覚	.35 ***	.05	.14 *	.12
味覚	.20 **	.01	.15 *	.10
嗅覚	.28 ***	.00	.18 *	.11
身体感覚	.16 *	.19 **	.16 *	.21 **
計	.34 ***	.12	.22 **	.21 **
TVIC		.08	.04	.07

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 4 夢想起に関する尺度とイメージの鮮明性 (QMI)・イメージの統御性 (TVIC)・心的境界 (JBQ) の相関

	夢想起尺度		QMI								TVIC	JBQ		
	頻度	鮮明性	視覚	聴覚	触覚	運動感覚	味覚	嗅覚	身体感覚	計		曖昧さ	脆さ	計
夢想起尺度														
頻度			.11	.13	.12	.14	.06	.10	.05	.13	.16*	.04	-.06	-.01
鮮明性	.23**		.13	.12	.17*	.21**	.16*	.12	.18*	.20**	.07	.19**	.16*	.21**
内容：														
飛ぶ	.18**	.12	.01	-.01	.11	.08	.10	.11	.03	.08	.13	.06	.13	.12
落ちる	.18*	.33***	.05	.14*	.21**	.20**	.24**	.15*	.13	.21**	.11	.14	.12	.16*
追いかけられる	.29***	.21**	.07	.02	.09	.08	.10	.08	-.05	.07	.02	-.02	.04	.01
覚醒ありの悪夢	.27***	.17*	.09	-.02	.07	.01	-.02	.09	.07	.05	.00	.14*	.12	.16*
覚醒なしの悪夢	.37***	.26***	.04	.05	.14	.07	.11	.11	-.04	.09	.12	.12	.08	.12
夢の自覚あり	.38***	.25***	-.00	-.08	-.02	-.09	.03	.08	-.01	-.01	.02	.04	.04	.05
感覚：														
視覚	.33***	.34***	.29***	.24**	.16*	.17*	.07	-.02	.12	.18*	.14*	.23**	.19**	.25***
色彩感覚	.19**	.32***	.27***	.18*	.17*	.10	.13	.09	.15*	.20**	.13	.14*	.14*	.17*
聴覚	.33***	.30***	.25***	.14*	.15*	.13	.07	.05	.14*	.17*	.07	.21**	.12	.20**
発話	.29***	.22**	.21**	.07	.10	.15*	.12	.10	.13	.16*	.09	.04	.04	.05
触覚	.37***	.20**	.15*	.13	.16*	.14	.14*	.18*	.05	.17*	.12	.15*	.14	.18*
運動感覚	.30***	.34***	.28***	.20**	.19**	.21**	.12	.05	.18*	.22**	.16*	.22**	.14	.21**
味覚	.31***	.09	.03	.01	.12	.07	.05	.12	.02	.08	.02	-.03	.04	.01
嗅覚	.22**	.14*	.07	.00	.11	.10	.09	.10	.06	.10	.05	.07	.18*	.15*
内臓感覚	.31***	.22**	.10	.08	.21**	.19**	.17*	.20**	.11	.19**	.17*	.11	.17*	.17*
痛覚	.19**	.27***	.04	-.03	.11	.12	.04	.05	.10	.08	.10	.04	.23**	.17*
温度感覚	.21**	.22**	.15*	.04	.17*	.16*	.19**	.15*	.13	.18*	.12	.18*	.21**	.24**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

夢想起の感覚モダリティにおいては、視覚がイメージの鮮明性の視覚と聴覚、心的境界の曖昧さと合計得点との間に弱い正の相関を示した ($r = .23 - .29, p < .01$ もしくは $p < .001$)。同様に、色彩感覚はイメージの鮮明性の視覚と合計得点との間に弱い正の相関が認められた (順に $r = .27, p < .001$; $r = .20, p < .01$)。聴覚はイメージの鮮明性の視覚、心的境界の曖昧さと合計得点との間に弱い正の相関を示した ($r = .20 - .25, p < .01$ もしくは $p < .001$)。発話は、イメージの鮮明性の視覚との間に弱い正の相関がみられた ($r = .21, p < .01$)。運動感覚は、イメージの鮮明性の視覚・聴覚・運動感覚・合計得点、心的境界の曖昧さと合計得点との間に弱い正の相関が認められた ($r = .20 - .28, p < .01$ もしくは $p < .001$)。内臓感覚は、イメージの鮮明性の触覚と嗅覚との間に弱い正の相関を示した (順に $r = .21, p < .01$; $r = .20, p < .01$)。また、痛覚と心的境界の脆さの間に弱い正の相関が認められた ($r = .23, p < .01$)。温度感覚は、心的境界の脆さと合計得点との間に弱い正の相関を示した (順に $r = .21, p < .01$; $r = .24, p < .01$)。

イメージの鮮明性の視覚・聴覚・合計得点、心的境界の曖昧さ・脆さ・合計得点は、他変数に比

して、夢想起の感覚モダリティ別体験頻度との関連が多くみられた。

イメージの鮮明性 (QMI)・イメージの統御性 (TVIC)・心的境界 (JBQ) と夢想起との関連の検討

イメージ及び心的境界が夢想起に与える影響を検討するため、イメージの鮮明性合計得点について平均以上を鮮明性高群、平均未満を鮮明性低群、同様にイメージの統御性得点の平均以上を統御性高群、平均未満を統御性低群、心的境界合計得点の平均以上を境界 thin 群、平均未満を境界 thick 群に群分けを行なった。

夢想起頻度について、イメージの鮮明性 (2 : 高・低) × 統御性 (2 : 高・低) × 心的境界 (2 : thin・thick) の分散分析を行なった結果、イメージの統御性の主効果が有意傾向を示し、統御性高群の方が低群に比して夢想起頻度が有意に高い結果となった ($F_{(1,190)} = 2.78, p < .10$)。

同様に、夢想起の鮮明性について、イメージの鮮明性 (2 : 高・低) × 統御性 (2 : 高・低) × 心的境界 (2 : thin・thick) の分散分析を行なった結果、イメージの鮮明性の主効果が有意であり、

高群の方が低群と比べ夢の鮮明性が有意に高いことが示された ($F_{(1,190)} = 4.06, p < .05$)。

考 察

本研究では、夢想起の頻度・鮮明性・内容・感覚モダリティ別体験頻度を取り上げ、その様相を報告するとともに、夢想起、イメージの鮮明性・統御性、心的境界の関連性を検討することを目的とした。

夢想起の特徴

夢想起頻度については「週に1・2回」とする割合が多かった。岡田(2000)でみられた「週に1・2回」の回答の割合である31.3%とほぼ同様の結果となった。夢想起の鮮明性は、かなりはつきりしているとの回答が全体の約半数を占め、また、夢想起頻度と夢想起の鮮明性との関連性が示された。夢想起の内容に関しては、飛ぶ夢、落ちる夢、悪夢は体験頻度が低かったが、追いかける夢や明晰夢は「月に1・2回」とする回答が一定の割合で認められた。感覚モダリティ別体験頻度については、色彩感覚、視覚、聴覚、運動感覚が高く、岡田(2000)と同様の結果を示した。夢想起の感覚的側面の特徴として、視覚・聴覚・運動感覚の体験頻度の高さが確認されたといえる。

イメージの鮮明性・統御性と心的境界

イメージの鮮明性と統御性とは弱い相関を示し、吉沢・長谷川(1975)や田村(2011,2017)等の先行研究の結果を支持するものとなった。心的境界との関連では、特に視覚イメージや触覚イメージの鮮明性との間に弱い正の相関が認められた。この結果は、イメージの鮮明性が高いほど心的境界が希薄になることを意味するものである。特に心的境界の脆さとの関連がみられたが、本研究で測定した境界の脆さとは、ある対象へ没頭し、現実へ戻ることの困難さをあらわす項目から構成されていた。視覚や触覚の感覚を伴い、現実に起こっているかのように鮮明に想起されることで、イメージや空想と現実との境が希薄化する可能性が考え

られる。

一方、イメージの統御性と心的境界とは有意な相関が示されなかった。視覚イメージの制御は心的境界の脆さや曖昧さには影響を与えないことが示唆される。これらイメージの鮮明性と統御性の結果の違いは、鮮明性と統御性は関連しながらもイメージの別の側面を捉えていることに起因すると推察される。

夢想起とイメージの鮮明性・統御性

夢想起頻度については、相関は弱いものの、視覚イメージの統御性が高いほど頻繁になることが確認された。夢想起の特徴として視覚的体験が報告されやすいことから、視覚イメージの統御性との関連が認められたと考えられる。視覚イメージの統御は、夢を見た・見ていないという夢想起のあり方にも微弱ながら関わるかもしれない。

夢想起の鮮明性はイメージの鮮明性との関連が示され、イメージの鮮明性が高いほど夢想起が鮮明になることが確認された。視覚イメージの鮮明性が高ければ夢想起頻度が高まるとした先行研究(Hiscock & Cohen, 1973; Richardson, 1979)とは異なる結果となり、Richardson(1983)の結果を支持するものとなった。夢想起の頻度及び鮮明性とイメージの鮮明性との関連については、更なる検討が必要である。

夢想起の内容のなかで、落ちる夢の体験頻度は、触覚イメージ・運動感覚イメージ・味覚イメージの鮮明性との相関が示された。また、視覚イメージの鮮明性と夢想起の視覚・聴覚・運動感覚等の体験頻度との間に相関が認められた。さらに、運動感覚の体験頻度は、視覚イメージ・聴覚イメージ・運動感覚イメージの鮮明性と関連していた。したがって、夢想起で体験される感覚と感覚イメージの鮮明性は弱いながらも相互に関連し、共通する側面をもつ可能性が示唆される。

夢想起と心的境界

心的境界については、夢想起頻度との間に有意な相関は認められなかった一方、夢想起の鮮明性

との間に弱い相関が示された。境界が薄いと夢想起頻度が高くなるとしたHartmann & Kunzendorf (2006) や Aumann & Pietrowsky (2012) の見解とは一致しない。児玉 (2013) が示したように、大人と子どもの境界、境界設定のこだわらなさ等、心的境界の概念には他の因子が含まれるが、本研究では脆さと曖昧さのみを取り上げたことが影響している可能性もある。心的境界の概念の検討及び夢想起頻度や鮮明性との関連については今後の検討を要する。

また、夢想起の感覚モダリティ別体験頻度と心的境界については、主に、視覚・聴覚・運動感覚の体験頻度は「意識された境界の曖昧さ」と関連し、痛覚・温度感覚の体験頻度は、「境界の脆さ」と関連を示した。「境界の曖昧さ」は、自分の中で色々な考えや感情が混ざり合っているといったような項目から構成されており、因子名の通り境界の薄さがある程度意識していると思われる。一方、脆さは境界を明確に意識していない状態であると考えられる。この心的境界の薄さを捉える側面の相違が夢想起の感覚体験に影響していることが考えられる。

夢想起とイメージ、心的境界

夢想起頻度はイメージの統御性と、夢想起の鮮明性はイメージの鮮明性及び心的境界と、各々相関が示される結果であった。全体として、これまでの見解と一部異なる結果が示されたものの、夢想起、イメージの鮮明性・統御性、心的境界は相互に関連することが示唆されたといえる。夢想起、イメージ想起、心的境界、これらはいずれも現実世界との「行き来」に深く関与する。そういった意味では、共通する心的過程を有する可能性も考えられる。

いずれにせよ、夢やイメージや心的境界は、臨床場面ではクライアントの理解やアセスメント、面接の展開において重要な役割を果たす。各々の関連性を考慮した上で臨床実践を行うことができるならば、より豊かな面接の展開に繋がると考えられる。

文 献

- Aumann, C., Lahl, O., & Pietrowsky, R. (2012) Relationship between dream structure, boundary structure and the Big Five personality dimensions. *Dreaming*, *22*, 124-135.
- Domhoff, B., & Gerson, A. (1967) A replication and critique of three studies on personality correlates of dream recall. *Journal of Consulting Psychology*, *31*, 431.
- Gordon, R. (1949) An investigation into some of the factors that favour the formation of stereotyped images. *British Journal of Psychology*, *39*, 156-167.
- Hartmann, E., & Kunzendorf, R.G. (2006) Boundaries and dreams. *Imagination, Cognition and Personality*, *26*, 101-115.
- Hiscock, M., & Cohen, D.B. (1973) Visual imagery and dream recall. *Journal of Research in Personality*, *7*, 179-188.
- Hobson, J.A. (1988) *The Dreaming brain*. New York: Basic Books.
- 川崎克哲 (2007) セラピストは夢をどうとらえるか - 五人の夢分析家による同一事例の解釈 - 誠信書房
- 児玉恵美 (2006) 自我境界と夢体験との関連性 - 身体像境界得点を用いて - ロールシャッハ法研究, *10*, 33-44.
- 児玉恵美 (2013) 日本版境界尺度 (JBQ) の作成および精神病理・創造性との関連の検討 応用障害心理学研究, *12*, 1-11.
- Marks, D. F. (1983) Mental Imagery and Consciousness: A Theoretical Review. In Sheikh, A.A. (Ed.), *Imagery Current Theory, Research, and Application*. New York: John Wiley & Sons, Inc. pp.96-130.
- 松田英子 (2006) 夢想起メカニズムと臨床的応用 風間書房
- 岡田斉 (2000) 夢想起における感覚モダリティ別体験頻度 人間科学研究, *22*, 2-9.
- 岡田斉 (2001) 夢: その生成過程と想起頻度の個人差 菱谷晋介 (編著) イメージの世界 イメージ研究の最前線 ナカニシヤ出版 pp.3-21.
- 岡田斉 (2011) 夢の中で感じる感情の頻度 - 肯定的感情が多い人と否定的感情が多い人の夢にはどのような違いがあるのだろうか - 人間科学研究, *33*, 31-40.
- 大熊保彦・鈴木晶夫 (1983) イメージと感情・動機 水島恵一・上杉喬 (編著) イメージの基礎心理学 誠信書房 pp.219-238.
- Richardson, A. (1969) *Mental imagery*. London: Routledge & Kegan Paul.
- (リチャードソン, A. 鬼沢貞・滝浦静雄 (訳) (1973)

- 心像 紀伊国屋書店)
- Richardson, A. (1979) Dream recall frequency and vividness of visual imagery. *Journal of Mental Imagery*, **3**, 65-72.
- Richardson, A. (1983) Imagery : Definition and Types. In Sheikh, A.A. (Ed.), *Imagery Current Theory, Research, and Application*. New York : John Wiley & Sons, Inc. pp.3-42.
- Robbins, P.R., & Tanck, R.H. (1971) MMPI scales and dream recall : a failure to confirm. *Perceptual and Motor Skills*, **33**, 473-474.
- Sheehan,P.W. (1967) A shortened form of Betts' questionnaire upon mental imagery. *Journal of Clinical Psychology*, **23**, 386-389.
- 田村英恵 (2011) イメージの鮮明と統御性および没入傾向の関連 立正大学臨床心理学研究, **9**, 31-37.
- 田村英恵 (2017) イメージの鮮明と統御性および常用性の関連 立正大学臨床心理学研究, **15**, 19-23.
- 吉沢幸夫・長谷川浩一 (1975) 自律訓練法イメージの鮮明性と統御可能性に関する一実験 (予備的検討) 催眠学研究, **19**, 30-32.

The relationships among dream recall, imagery, and boundary in the mind

Hanae Tamura¹⁾ Kayoko Yoshida¹⁾

[Abstract]

The purpose of this study was to discuss the relationships among dream recall, imagery, and boundary in the mind. Frequency, vividness, contents and sensation modality as the aspects relating to dream recall; vividness and controllability of imagery; fragility and ambiguity as boundary, were dealt with in this study. Undergraduates were administered with the following questionnaires : Questionnaire on Dream Recall Frequency, the short version of Questionnaire upon Mental Imagery (QMI), Test of Visual Imagery Control (TVIC), Japanese Boundary Questionnaire (JBQ). The data of 198 undergraduates who answered all question items were subject to the analyses. Regarding JBQ, seven items had been selected and used in this questionnaire survey respectively for “boundary fragility” and “consciousness ambiguity of boundary”, based on which results factor analyses were performed. The ten items in total - six items for “consciousness ambiguity of boundary” as the factor 1 and four items for “boundary fragility” as the factor 2 - were used for analyses thereafter. The analyses revealed a significant positive correlation between the vividness of dreams and the vividness of imagery (QMI) as well as the vividness of dreams and boundary. Further, the results indicated that the group of subjects with the higher imagery vividness demonstrated the significantly high vividness of dreams compared to that with the lower imagery vividness. Our results suggest that imagery, boundary in the mind and dream recalls were related with each other and that the vividness of dreams, in particular, had a correlation with the vividness of imagery and boundary respectively.

[Key Word] dream recall, vividness of imagery, controllability of imagery,
boundary in the mind